

中世における曹洞禅者の教養

原 田 弘 道

一

中世の曹洞禅者の知識教養の傾向を見ることによつて、中世曹洞禅の一側面を明らかにしようとするものである。また小論は『駒沢大学仏教学部編集』第七号所収の「中世曹洞宗における五位と仮名法語」の補足継続的論考である。

さて、中世曹洞宗をここでは永平下十世までに区切つて考えたいと思う。その理由は、『蔭涼軒日録』延徳三年（一四九二）正月二十五日条に

又曰、何尊宿有道氣、謹曰於江湖立知識門教者皆曹洞宗也。濟下嫌之。雖然於工夫用心處、一掃曹洞宗也、殊橫川者有一面目者也、以之、不為業者也。⁽¹⁾

と江湖会の盛儀が取り上げられたことが出ている。その存在も五山派からも注目され、曹洞宗教団として有力寺院も三百から五百ヶ寺になり、独自の歩みも定着してきた頃である。

初期において交渉が密接であつた臨濟宗法燈派も

大凡國師之伝不嗣十世。今掃土而尽、悲夫⁽²⁾

とその派も跡を断たんとしていた頃で、従来の関係も失われ、新段階を迎えるようとしていた時代もある。

また永平下八世の南英謙宗（一三八七—四五九）が、臨濟宗の石霜によつて改変された五位をそのまま曹洞下において踏襲していた中國以来の伝統を否定して、洞曹五位に復古して名実共に曹洞宗の宗風が確立定着したのがほぼ十世頃と見てよいのではないかと思うからである。

一方總持寺教団は隆盛の一途をたどつていた。明応、永正（一四九二—五一〇）の頃、永平下十世曇英慧応があつて、彼は峨山派五哲通幻寂靈（一三三二—一三九二）の流れを汲む者であるが、同門の永平下七世周防龍文寺器之為璠らと提携し、諸山の輿議によつて、永平寺に入り、その復興をはかつた。彼らの努力によつて永平寺は再興された。そして永正四

(一五〇七)年十二月十六日に後柏原天皇から「本朝曹洞第一道場」の勅額を、天文八(一五三九)年十月七日には後奈良天皇から日本曹洞宗第一出世道場追認の綸旨をそれぞれ賜わるに至つた。⁽³⁾こうして瑩山禪師(一二六八—一三二五)・峨山紹碩(一二七五—一三六五)派の尽力によつて、永平寺教団が復活し、ここに三代相論以来、分裂状態にあつた曹洞宗教団が統一され、永平寺を頂点とする近世曹洞宗教団の基礎が形成されるその端緒となつたのが、この頃であるからもある。以上上の理由によつて十世に限つて考えて見たい。ただ云うまでもないことであるが、十世までを中世とするのではなく、中世という時代の中で、大部分を占めているのであるが、十世までを一応考察の対象とするということである。

[註]

- (1) 「蔭涼軒日録」『大日本佛教全書』第一三六
- (2) 「本朝高僧伝」二十五、『大日本佛教全書』
- (3) 竹内道雄氏『日本の禪』二九一頁

二

初期における宗旨参究の基礎は『正法眼藏』であるが、永平寺においては、永平義雲(一二五三—一三三三)が六十巻本を参考の指南書として活用していたのであるが、以後は永平寺に秘藏されていて、時の住持が年一回、虫乾しの時のみ拝

覽を許されるような状態にあつた。太容梵清(寂年不詳)の八十四巻書写になるのは、義雲が『品目頌』を書いた嘉歴四(一三三九)年から約八十年後に当る。

初期に眼藏を受けているとと思われるものに、『瑩山和尚清規』に「十二時中行履、如弁道法、赴粥飯法、洗面法、洗净法、并寮中清規、參大己事師法等、悉細也、悉可暗之」とあって、『眼藏』の「洗面」「洗净」を指すか、「洗面法」「洗净法」は『永平清規』の「弁道法」を指すか、どちらかを指している。また衛藤即応博士は『正法眼藏』「弁道話」と『瑩山和尚法語』との関係について、瑩山禪師が「弁道話」を見ていることを指摘されている。⁽²⁾また『洞谷記』『伝光錄』に、その他、明峯素哲(一二七七—一三五〇)、峨山紹碩、祇陀大智(一二九〇—一三六六)に、『正法眼藏』の精神を受けたと思われる文章がわずかながらも指摘されている。

文安三(一四四六)年、十二巻本『眼藏』筆写、永光寺蔵は「室中の書」として重んじられていたといわれる⁽³⁾。七十五巻本は寿雲良椿等筆写(永正九年、一五一二)が正法寺に、あるいは「弁道話」も正法寺に所蔵されていた。大乗寺には八十九巻本が所蔵されており⁽⁴⁾、洞雲寺には六十巻本があり、また南英謙宗は(一三八七—一四五九)、傑堂能勝(一三五五—一四二七)の命によつて、『正法眼藏転法輪』の筆写を行つたことが「種月南英謙宗和尚行業記」に

永平寺檀那波多野元尚、以_ニ永平開山真筆転法輪書。贈_ニ与耕雲先師。師即日与_ニ永平襄祖_ニ設_レ斎。仍為_レ顯_ニ示其語。遂秘_レ之。翌日命_ニ謙宗_ニ写_ニ一冊。其一冊先師常誦持。一冊乃授_ニ与謙宗。殊以為印心之証。⁽⁵⁾

とある。その他所々にあるが、このようにわずかながらも、『眼藏』が書写伝持されていた形跡が存するのである。

しかしながら南北朝以後は、その大勢としては、『正法眼藏』に代って五位が宗旨参究の主役になり、これを背景にして洞済融和的学風が益々顯著になってきた。そこで曹洞禅者の知識教養の一般的傾向がどんなものであったか、これを概観し、そして五位との関係において見、そこから提出される若干の問題について触れてみたいと思うのである。

そこで『日域洞上諸祖伝』『続日域洞上諸祖伝』『重續日域洞上諸祖伝』第一卷—第三卷、と『日本洞上聯燈錄』第一卷—第七卷、即ち道元禪師会下第二世から第十世までの四百十二名について見てみよう。

まず学歴であるが、曹洞宗に転ずる前に叡山及び諸教院にあって、仏教学の研究に努め、また臨済禪を学び、その後曹洞宗に転じた禅者は、孤雲懷粹（一九八—一二八〇）、徹通義介（一二三二—一三〇九）、明峯素哲、峨山紹碩、実峰良秀、竹居正猷、南英謙宗、定津院拈笑英、希明清良、了堂真覚、天鷗祖祐⁽⁶⁾、正海慈孝⁽⁷⁾の十二名を数える。

洛陽官族也、幼齡聰習敏利、耽_ニ嗜經籍。無_ニ少懈。一日見_ニ十牛図、忽信_ニ宗門中事。

龍興寺希明清良は『日本洞上聯燈錄』四に、遂投_ニ清水寺下髮受具。習_ニ天台教觀。一日至_ニ建仁。見_ニ禪規肅清可_ニ則。而志慕_ニ宗門。易_レ衣隨_レ衆參究。会_ニ竜山和尚開_ニ法南禪。

孤雲懷粹は『日域洞上諸祖伝』上に、博學_ニ止觀、法相、俱舍、成実、三論。究_ニ其源底、兼修_ニ淨土法門。

とあり、その後達摩宗から道元禪師に投じているのは周知の如くである。

徹通義介も

年十三依_ニ本州波著寺懷鑑和尚_ニ祝髮。翌歲上_ニ叡嶽_ニ受_ニ具戒。學_ニ台教。又帰_ニ受業院。究_ニ明楞嚴_ニ兼修_ニ習淨業。二十三改_レ衣參_ニ道元禪師_ニ興聖。

とある。

明峯素哲は

出_ニ家於睿峯_ニ習_ニ教乘。掛_ニ錫於建仁_ニ如_ニ禪要。終到_ニ加之大乘。峨山紹碩は、

遂登_ニ叡嶽_ニ斷髮奉戒。習_ニ止觀_ニ曉_ニ大旨。尋常不_ニ妄發_ニ言。

とあり、その後、明峯素哲と共に恭翁運良（一二六七—一三四）に参じている。

実峰良秀は

師造席下。……密聞天眞和尚住越之慈眼弘曹洞宗旨。往依之。

了堂真覚⁽⁸⁾は、

学三密教。……一日閱夢窓語錄。有省。

大寧寺竹居正猷は、

自復洛之南禪。相之龜谷。遠之楞嚴。到處究仏祖多教差別奧義。

……又禪余為後學講諸大乘經。聞者歡喜奉行。

南英謙宗⁽⁹⁾は、

又自称三種道人。八歲投大岳全愚公于洛之万年。……初掛錫於龜阜天竜。而習文字禪。次登台山。學智者教乘。參梅山和尚。……見石屋禪師。……到後越之耕雲。謁傑堂師翁云。顛面無回互。許唱五位三墮三滲漏等。

定津院拈笑英⁽¹⁰⁾は、

遂投州之教院。二十納戒於睿嶽。深探顯密二宗。至二十九歲。而捨所學。慕禪要。入相陽建長寺。

と教宗と臨濟に参じて いる。

次に曹洞宗に転ずる前に教院にあつて仏教学の研鑽に勤めた者は五十五名いる。

永興詮慧は、

幼而剃染於橫川。性利銳而見聞甚遠。學通顯密之宗要。

義準は、

尋上叡嶽。探賾三歲。後屬道元禪師之播揚宗猷於吉祥。

寒巖義尹（二三〇〇寂）は、披剃于叡嶽。習台教。已而捨其所業。

永平義雲は、

幼而不甘処俗。依教院出家。肄華嚴法華之疏抄。年二十四忽自歎云。金鱗合化竜。曷煩拘教網乎。奮然更衣抵越之薦福。

通幻寂靈（一三二二十一三九一）は、

十一歲入台山受業。天性英敏。凡内外經史一經其目。無不二通曉。台徒交相稱譽。十四剃落納戒。或於止觀中。有所疑問。諸師輒引經論。皆不憚師意。邪慕禪門直指之說。乃往能之總持。參峨山和尚。

梅山聞本⁽¹¹⁾は、

稚歲投州之律寺剪落。習教律科。……聞太源禪師為峨山和尚之法嫡。而道化翕如。

傑堂能勝は、

河州楠正成第三子也。……十七歲落飾拔縕。自後尋訪教律耆德。

皆得染指。

龍興大見禪龍は、

通明經律。廻異恒流。聞希明和尚在起之龍興。聞鵠禪法上。

川僧慧濟は、

幼而在州之華藏精舍。而讀書。凡經史過目成誦。

雙林寺月江正文は、

周ニ歴講肆。広閱ニ梵篇。皆如ニ迎刃而解。既而到處講說諸經。

竜谿院茂林芝繁は、⁽¹²⁾

年十七離ニ鄉曲。游ニ講肆。徧ニ諸經論。

竜泰寺華叟正萼は、

稍長而博學ニ經論。十七歳於ニ教中所々謂心身不二之文。深生ニ疑遂

出遊入ニ台山。咨ニ叩諸師。

慈眼寺大空玄虎は、⁽¹³⁾

出ニ家州之教院。學業勤勤。遂厭ニ教相繁祺。改々服入ニ禪。

大寧寺智翁宗は、

深探ニ教乘。因聞ニ首楞嚴ニ有レ省。往到ニ薩州妙円寺。

清安寺鑑窓全は、

始學ニ教乘。後慕ニ禪門。參ニ石屋和尚。

円通院大輝曜は、

初經ニ講肆。略領ニ大意。

國分寺蒲菴睦は、⁽¹⁴⁾

染ニ指干台教ニ一旦捨去。參ニ竹居於瑞雲。

円福寺天海曇は、

及レ長志慕ニ仏乘。

洞壽院真巖空は、

專學ニ密教。

最乗泰交康は、⁽¹⁵⁾

善解ニ羣書。広閱ニ經疏。粗究ニ奧義。

濃州泉林道存は、

出ニ家干高野山。習ニ秘軌灌頂法。修ニ阿字觀。

光孝壺庵至簡は、

初習ニ唯識。滯ニ於名相。

大慈能翁玄慧は、

數年間博極ニ經史。……便付ニ五位顯訣等。

正法寺月泉良印は、

能州人。髫歲投ニ教院。祝髮。研究顯密諸教。

永德道叟道曼は、

登ニ叡山。依ニ師薙髮。受ニ滿分戒。習ニ止觀。二十四歳捨ニ所業。

法泉泰菴了運は、

艸年出家具戒通ニ經論。

古山良空は、

十九才投ニ邊之教院。薙髮。習ニ天台止觀。

太陽明中は、

去從ニ國清寺下髮。

智翁永宗は、

十一登ニ州之華嶽。投ニ円妙法師。出家。……深探ニ教乘。因聞ニ首

楞嚴ニ有レ省。

西來鑑窓永鑑は、

始學ニ教乘。後慕ニ禪門。

曹龍大圓禪雄は、

初拾妻女。即學空宗。聞有別伝之道。

新豊機堂長応は、

遂投本郡教院。円頂納戒。徧歷講席。凡三藏聖教扉不教練。已而。

玉麟詔天は、

習毘尼。偶閱楞伽經。

慈光虛廓長清は、

初游講肆。

洞壽真嚴道空は、

專習密教。感白山神社而創洞壽院於此地。

円通大輝靈曜は、

初經講肆。十九歲自慕別伝之旨。

洞松茂林芝繁は、

天智帝後也。偏游講肆。究諸經論。

宝福麟翁永祥は、

試法華得度。徧游講肆。該鍊三藏棄遊方參竹居於大寧。

竜穩寺泰叟妙康は、受具後徧遊講肆。

興禪幻仲瑞秀は、

初游講席。及參鼎菴。得言外旨。

円通虛堂性宙は、

十五羅髮。精究台教。

石雲崇芝性岱は、

早有絕塵之趣。十才依教菴主習般若心經。

乘國松庵字榮は、

八才入鄉校。投書能誦。十七歲詣在和尚得度。尚修文章。

常泉斷江周恩は、

一日閱圓覺經。

龍穩天菴玄彭は、

投里院。窮覽經論。徹義髓。

成高天英祥貞は、

十五遊洛陽。肄經傳。氣識超倫。博通群書。

(16)とあって、その他九名いる。成高天英祥貞の場合は短期間だが、建仁寺にあつたこともある。

〔註〕

(1)「瑩山和尚清規」『曹洞宗全書』宗源下。

(2)『正法眼藏序説』で、「法語と弁道話との直接の関係はいざれにあるかといえば、弁道話の十九問答の終りの方で、この坐禅は在俗の人ももとむべきや、との間に答える中に、『ちかごろ大宋に馮相公といふありき、祖道に長ぜりし太官なり、のちに詩をつくりて、みづからをいふにいはく』として一偈を挙げてあるが、太祖の法語では、長老という言葉の意義を解説するところに『太唐に馮相国といへる人あり、祖道に長

せりし太官なり、後に頌を作るに曰くとして、この同じ偈頌をあげ、俗人たりといへども、祖道に長ぜるゆえに世の人は長老と呼んだと解説してある。しかして故実は、道元禅師の全著作の中で、ただ一度弁道話に出ているのみであるから、太祖は弁道話を見られたものと考えてよいと思う。」と指摘している。

(3) 大久保道舟博士『道元禅師全集』上、解題。

(4) 永久岳水博士『正法眼藏の異本と伝播史の研究』四十八頁。

(5) 「種月南英謙宗和尚行業記」『曹洞宗全書』史伝下二八七頁。

(6) 「正眼寺天鷹祐禪師伝」『投州之律寺』円顱方袍。戒行高潔。

広探^ニ教部^ニ遂慕^レ有^ニ教外別伝旨^ニ更^レ服遊方。時通幻和尚。

道風卓^ニ冠天下^ニ師直趨謁云……』『曹洞宗全書』史伝上(「日域洞上諸祖伝卷之下」)五九頁。

(7) 「即脱^ニ白干京師南禪寺^ニ年滿登^ニ台山^ニ受^ニ具戒^ニ遂由^レ洛經^ニ北地^ニ抵^ニ東閔^ニ復還^レ鄉菴^ニ居洞津答世山^ニ……忽遇^ニ珍玉叟^ニ近前作礼」『日本洞上聯燈錄卷第五』『曹洞宗全書』史伝上三

四〇頁。

(8) 孤雲懷粹より了堂真覚までは「日域洞上諸祖伝」卷之上、『曹洞宗全書』史伝上。

(9) 竹居正猷と南英謙宗は、「日域洞上諸祖伝」卷之下、『曹洞宗全書』史伝上。

(10) 「続日域洞上諸祖伝」卷二、『曹洞宗全書』史伝上。

(11) 永興詮慧より梅山聞本は「日域洞上諸祖伝」卷之上、『曹洞宗全書』史伝上。

(12) 傑堂能勝より竜谿院茂林芝繁までは「日域洞上諸祖伝」卷之

下『曹洞宗全書』史伝上。

(13) 竜泰寺華叟正萼、慈眼寺大空玄虎も「日域洞上諸祖伝」卷之下、『曹洞宗全書』史伝上。

(14) 大寧寺智翁宗、清安寺鑑窓全、円通院大輝曜、国分寺蒲菴睦は、「続日域洞上諸祖伝」『曹洞宗全書』史伝上。

(15) 円福寺天海曇、洞寿院真巖空、最乗寺泰麥康は「重統日域洞上諸祖伝」『曹洞宗全書』史伝上。

(16) 濃州泉林寺道存より成高天英祥貞までは、「日本洞上聯燈錄」卷一一卷七『曹洞宗全書』史伝上。

三

次に、臨濟宗にあつた者、及び臨濟派下を歴参して曹洞宗に転じてきた者は、「日本洞上聯燈錄」に、

永平義演は、

受^ニ業於波著寺懷鑑^ニ

している。

永興量外聖寿は通幻に嗣法するまで、

徧參^ニ諸名宿^ニ

と臨濟下にも参じたことを伺がわせている。

示現天海空広は、

依^ニ嵯峨天竜寺^ニ出家^ニして^ニおり、

瑞光春巖祖東は、

初參黒川月菴……依大徹偶晚參徹舉臨濟四賓主

聖光悅堂常喜は、

十四受度於天竜寺

大乘桂巖英昌は、

掛錫於洛建仁

し後、徹山旨廓の法嗣となつてゐる。

了菴慧明法嗣大慈大綱明宗は、

依塩山抜隊勝公得度。

慈光顯窓慶字は、

尋遊京師侍義堂信公、有年矣。後還郷菴居

し、耕雲傑堂能勝の法嗣となつてゐる。

四天王正海慈孝は玉叟良珍嗣。

稍長有超塵志即脱白干京師南禪寺

最勝吾宝宗璨法嗣、普門漠菴宗範は、

尋遊京師侍一休干紫野得激発

円通牧翁性欽法嗣、円通雷庵性隆は、

受具戒後、徧參東閔諸尊宿、趨洛見日峰於妙心

雙林曇英慧念は一州正伊の法嗣で、

侍麟天瑞於相府円覺

大菴須益法嗣大寧全巖東純は、

將遊學京師、路過鎌倉。見禪林軌則整肅而深慕之。留錫
於建仁。……終到京師、訪天隱於南禪

円通虛屋性宙法嗣円通竹馬光篤は、

十七歳、遁抵洛。投一休於紫野

心月海園梵覺は、⁽¹⁾

詣京師南禪寺、礼竺雲禪師為師。

『日域洞上諸祖伝』上に、

妙念大徹宗令は、

厚志此道徧歷諸宗名衲、到能之總持、謁峩山和尚

最乗了菴慧明は、

薙髮於相之建長、居不幾行丹之永沢、謁通幻禪師、
福昌石屋真梁は、

延文間入京師、礼南禪蒙山公為力生、十六歳落髮進具。出
謁東陵璵和尚於西雲、見雲樹嗣子古劍訥公、機語投合。尋往
丹之永沢、參通幻禪師

禪林普濟善救は、

年十三依本州淨住寂室禪師披剃。十五受具足戒、初遊方參天
閔干相之東勝、閔遷寿福、師偕往。十九拳掌書記、次謁中庭
干能之洞谷、……又到洛之建仁、卓錫者幾三祀。終行丹之永
沢、礼通幻和尚

祇陀大智祖繼は、

便跨舶入元。首謁古林茂、繼見雲外岫。中峰本、無見觀諸大

老、

興禪不見明見は、

七歳喪母。因隨雲樹三光國師受歸戒……遁出徑行東閨

投大拙能公于円覺剃落。日夕辨道。次謁妙応大徹禪師

大乘籌山了運は、

首參南禪省德嚴。未有所入。辭還加比。竭桂嚴於大死。便問

萬法帰一。

桂林竺仙得遷は、

初謁中峰嗣子宗日菴主。菴主一見異之。……次參寂室和尚於

近之山上。平心和尚於濃之水野

円通英仲法俊は、

徧扣洛下東閨諸大老之門。終謁天真禪師于越之慈眼

小林嫩桂栄は、

始參願成芳菴禪師而受決。後渡海入支那。徧謁有德

竜文器之為璠は、

始投雙桂和尚南禪習翰墨

福嚴盛禪洞夷は、

稍長志遊歴。始入洛寓止建仁。往來瑞竜慧日之間。究臨濟宗

旨

『続日域洞上諸祖伝』卷二までによると、

宝福寺宇堂覺円は、

投南禪椿庭寿禪師剃度

茂林大林子通⁽²⁾は、

一日抵円覚寺。悵然発出纏志。遂薙染。徧扣洛下相陽諸尊宿

『重統日域洞上諸祖伝』には、

永光中庭宗可は、

尋至婺之雙林。謁明極俊禪師

明白和尚は、

依耕雲傑堂禪師得度。遊于京師。侍義堂信公有年矣。

榮林直伝玄賢は、

迨長投南紀由良

最乘模菴宗範は、

尋遊京師。侍休干紫野。得激發者夥矣。

その他、『曹洞宗全書』史伝下、「玉竜山福昌禪寺開山石屋禪師塔銘并叙」には、石屋真梁が、「師年二十有七。竊出南禪。詣丹之九世⁽³⁾」と南禪寺にいたことが分る。

全体で三十七名を数えるが、変った所では前の学歴で易学を学んでこれを究めた人に、「於墳典史籍無不精究。尤邃於易學⁽⁴⁾」と、川僧慧斎法嗣、尾州乾坤院逆翁宗順がいる。

次に教学の素養や修行の経歴に直接関係はないが、その誕生にあたって、母が觀音大士、瑠璃光仏に祈つたり、あるいは靈夢によるとか、その他様々な奇瑞を示している場合がある。これらは共通して母親の信仰心の深さが示されている。幼時における信仰深い家庭環境も無視出来ないものがある。従つて、宗教であるかぎり、広い意味ではこういった事柄も経歴の一つと見ることもさほど不当ではないと思うのであ

る。試みに誕生にまつわるこういった例を示している禅者を拾いあげてみると三十六名いる。

瑩山禪師は

母夢_ニ呑_ニ日光_一有_レ孕_。自此毎日詣_ニ觀音像前_一礼三百三十三拜。
課_ニ普門品_一三十三卷。願_レ生_ニ聖子⁽⁵⁾

とあり、

峨山は、

母禱_ニ文殊大士_ニ願_レ得_ニ智慧男子_一因夢_ニ呑_ニ利劍_一有_レ孕₍₆₎。

通幻は、
其母禱_ニ清水觀音_ニ願_レ得_ニ男子_一限_ニ一百日_ニ誦_ニ普門品十卷_ニ遂有₍₇₎妊_。

石屋真梁は、

夢_ニ白衣大士降臨_ニ有_レ孕_。生而穎異⁽⁸⁾。

天鷹祖祐は、

姓波多野、加州人、夢_ニ日光照_ニ尾。覺即有_レ孕⁽⁹⁾。

とある。

その他、主な者の名前をあげると、泉谿寺玄翁妙、大光寺天徳貞、雙林寺一州正伊、林泉寺曇英慧念、福嚴寺盛禪洞夷、寶福寺字堂覺正、靜泰寺館開僧生、總光月菴良円、英仲法俊、天先祖命、希明清良、正法在山融松、雲林寺不琢玄珪、崇信寺石雙円極、大陽寺足室円給、永泉玉岡慶琳、宝福麟翁永禪、東昌郎菴字覺、龍泰華叟正萼、開元月泉性印、真珠大

寧了忍、大寧全巖東純等である。

春庭見芳は、これは母ではなく、「年十二隨_レ父詣_ニ清水觀音_一、其夜父子同夢、大士放_レ光來摩頂言……」とあって、父子が同じ夢を見て出家したという特殊な例もある。「器之禪師塔銘」に「奇事異端甚多⁽¹¹⁾」と器之為璠に靈異に類するものがあつたようである。

このように靈夢奇瑞を伴つた禅者や他宗で学んだ者も多くおり、経歴から見て、その限りでは教養は禅宗一般に通ずるもののが多かつたことが一応伺えるのである。

しかしながら、それでは曹洞宗の独自性はないかといふことであるが、次にこの点について見てみよう。

そこで、曹洞禪の宗旨参究及びその挙揚にあたつて用いているのは機関である。中でも一番多いのは当然の事ながら五位である。

これを伝記・語録等によつて見ると、瑩山禪師は大智祖繼から「曹山之重編五位君臣二冊真歇の語」を贈られている。⁽¹²⁾

「義雲和尚語録」には「四種分_ニ主賓_一、五位列_ニ偏正_一」と四賓主と五位を説き、峨山には「山雲海月」に五位君臣、三玄三要が見え、「通玄禪師語録」には五位、四借、三玄が説かれ、「補陀開山月泉禪師語録」には、「善男子五位一覺從_ニ本処_一入」とあり、「寒峰良秀禪師語録」卷下の「示_ニ玄能上座」とあつて五位が示され、「示道城居士」に「道無心叶_レ人、

在位借功。人無心叶道。転功就位。⁽¹⁵⁾とある。『普濟和尚住丹州青原山永沢寺語録』に「五位偏正回互不犯中⁽¹⁶⁾」、「普濟和尚住能州洞谷山永光寺語録」に「師乃云。洞山五位、臨濟三玄五位歸⁽¹⁷⁾一位。三玄具⁽¹⁸⁾一玄。」とある。「周防路鹿王山竜文寺開山竹居禪師塔銘」には「夫洞上語句。君臣道合。偏正回互。金針雙鎖。寶鏡洞開。以明⁽¹⁹⁾向上一機。非⁽²⁰⁾其門葉⁽²¹⁾則不可委悉。」と示している。『瑞巖禪師語録』にも見え、「器之為璠禪師語録外集」に「品⁽²²⁾操五位君臣⁽¹⁹⁾」とあり、「川僧禪師語録」卷之上にも「墮⁽²³⁾君臣偏正間⁽²⁰⁾」その他隨處に見える。「菊隱和尚下語」に「故會⁽²⁴⁾三玄旨趣。曉⁽²⁵⁾五位偏正⁽²⁶⁾」とある。中には徳雲寺希曇のように「三玄」を、大徹宗令の法嗣天巖宗越は「四賓主」を行っている例が見え、雪叟一純は「臨濟三玄・洞山五位」と五位の他に三玄も説いている。⁽²²⁾

その他法泉仁叟淨熙法嗣大慈寺能翁玄慧は「數年間博極⁽²³⁾經史……便付⁽²⁴⁾五位顯訣等」⁽²⁵⁾とあり、祇陀大智にも、泉溪寺齡山延には「翁点首。付以⁽²⁶⁾宝鏡三昧。五位顯訣等。舉為⁽²⁷⁾第一座」と師の玄翁から授けられている。福嚴寺盛禪洞夷は「次登⁽²⁸⁾大洞⁽²⁹⁾礼⁽³⁰⁾祖塔」時如仲嗣子。嘿堂智公。薰⁽³¹⁾大洞。師附而決⁽³²⁾五位旨訣。得⁽³³⁾其大要。」と嘿堂智公から五位を受けている。大祥寺行之正順にも「栗色伽黎山水紋。五位君臣在此中⁽²⁶⁾」。最乗寺大綱明宗は「菴塔⁽³⁴⁾五位旨要暨法衣⁽²⁷⁾」

とあり、皇德寺得翁永は「建⁽³⁵⁾五位旗。布⁽³⁶⁾三玄戈⁽²⁸⁾」とあり、広嚴院雲岫宗竜は「或時偏正雙明。或時偏正雙泯⁽²⁹⁾」と五位が行われていたことがわかる。このように多くの曹洞禅者によつて挙揚されているのである。

また一方太源派でも重んじられ、太源宗真は上堂語に「洞上之宗乘以⁽³⁷⁾五位⁽³⁸⁾究⁽³⁹⁾事理、以⁽³⁹⁾君臣⁽⁴⁰⁾分⁽⁴¹⁾上下」⁽³⁰⁾とあり、了堂真覚も「碧巖錄」第五則「趙州万法帰⁽³¹⁾」の語と共に特に五位を重要視している。太容梵清は「語録」で、回互旁參偏正五位を拈提し、祖翁太源宗真と同一立場に立つて⁽³²⁾いる。しかし、一方では当時の一般的風潮といわれる「易」に偏したものがも説いている。

太源から法嗣梅山聞本、傑堂能勝、南英謙宗においても師資相承されており、特に傑堂と南英に至つて五位は大いに宣揚され、石霜五位が洞曹五位に復古されたのは曹洞宗の独自な宗風が意識されてきたものと云えよう。

このように多くの禅者が五位を参究していた訳であるが、その語録に見えなくとも、あるいはその伝記にあらわれていなくとも、その師匠もしくは弟子に見える場合、一概に云えないにしても、一般的に云つて当人も参究あるいは関心をもつていたと見ても良いのではないか、そうすると相当数にのぼる訳である。

〔註〕
(1) 永平義演より心月海園梵覺までは「日本洞上聯燈錄」『曹洞宗全書』語錄一、

宗全書』史伝上。

(2) 妙應大徹宗令より茂林大林子通までは「日域洞上諸祖伝」

『曹洞宗全書』史伝上。

(3) 「玉龍山福昌禪寺開山石屋禪師塔銘并叙」『曹洞宗全書』史伝下、二八一頁。

(4) 「日本洞上聯燈錄」『曹洞宗全書』史伝上、三七〇頁。

(5) 「日本洞上聯燈錄」卷二、『曹洞宗全書』史伝上、二四四頁。

(6) 右同、二五〇頁。

(7) 右同、二五九頁。

(8) 右同、二七四頁。

(9) 右同、二七八頁。

(10) 「続日域洞上諸祖伝」卷一、『曹洞宗全書』史伝上、一〇〇頁。

(11) 「器之禪師塔銘」『曹洞宗全書』史伝下、二九七頁。

(12) 「正中二年五月廿日。鎮西智侍者、遠訪風來、曹山重偏、五

位君臣、二冊。投子青語、一冊。真歇了語、一冊。将来云。

重編者。大宋國未流布。況乎日本始見之。大可_ニ秘藏_ニ非_ニ其人_ニ者。不可_レ令_レ見。為_ニ家重_ニ云々」「洞谷記」(『曹洞宗

全書』宗源下)。

(13) 「義雲和尚語錄」上、『曹洞宗全書』語錄一、八頁。

(14) 「補陀開山月泉禪師語錄」『曹洞宗全書』語錄一、一〇三頁。

(15) 「寒峰良秀禪師語錄」卷下、『曹洞宗全書』語錄一、一一五

頁。

(16) 「普濟和尚住丹州青原山永沢寺語錄」『曹洞宗全書』語錄一、

一三〇頁。

(17) 「普濟和尚住能州洞谷山永光寺語錄」『曹洞宗全書』語錄一、

一三五頁。

(18) 「周防路鹿王山竜文寺開山竹居禪師塔銘」『曹洞宗全書』史伝下、二九五頁。

(19) 「器之為璠禪師語錄外集」『曹洞宗全書』語錄一、二三〇頁。

(20) 「川僧禪師語錄」『曹洞宗全書』語錄一、二九八頁。

(21) 「菊隱和尚下語」『曹洞宗全書』語錄一、五七四頁。永昌菊隱

瑞潭は永平下十一世にあたるが、中世の少い語錄のうちの一

つであるので、あえて入れたのである。

(22) 雪叟一純は「臨濟三玄、洞上五位。各立_ニ宗風_ニ吾無_ニ一玄_ニ亦無_ニ一位」(「日本洞上聯燈錄」卷五『曹洞宗全書』史伝上三四〇頁)と五位によりながら五位を超えている所を示して

いる。

(23) 「日本洞上聯燈錄」卷二『曹洞宗全書』史伝上、二五三頁。

(24) 「日域洞上諸祖伝」卷之下『曹洞宗全書』史伝上、六三頁。

(25) 「日域洞上諸祖伝」卷下『曹洞宗全書』史伝上、八一頁。

(26) 「続日域洞上諸祖伝」卷第二『曹洞宗全書』史伝上、一一四

頁。

(27) 「重續日域洞上諸祖伝」卷第二『曹洞宗全書』史伝上、一六

三頁。

(28) 「重續日域洞上諸祖伝」卷第二『曹洞宗全書』史伝上、一六

四頁。

(29) 右同、一七二頁。

(30) 「日本洞上聯燈錄」三、『曹洞宗全書』史伝上、二五八頁。

(31) 「有_レ僧請_ニ問五位訣」師丁寧伝持」(「日本洞上聯燈錄」三、『曹洞宗全書』史伝上、二七一頁)。

(32) 「弄_レ巧成_レ拙。木人位退。拾_ミ金針於子夜」正兼_レ偏而雙行。

石女機回。寄_ミ錦綉於西隣」偏兼_レ正不_ニ單子」(『曹洞宗全書』語録上)。

四

このように五位が重用せられ、それとともになつて『正法眼藏』が表面から姿を消した問題に関しては、すでに本研究紀要三十三号所収の拙稿「中世曹洞禪の一考察」において、その積極的理由と消極的理由の両面からの管見を述べてあるので、小論においては触れないでおこう。

さて、五位が宗旨表明の機關として、とられてきた一方では、実踐規範的性格を持つたと見られるので、清規との関係も一應見なければならない。兩者には『正法眼藏』と「永平清規」との関係にみられる如き親密な関係は見出せない。これは五位の宗旨参究が日常底の生活にまで根付くに至らなかつたことを意味するか、或いは五位自体が中世の時代状況下で特殊な生活規範としての意味を持ち、即ち清規には見ることの出来ない曹洞宗教団の指導原理及び総帶の機能と意義を

いたものか考えられる訳であるが、私は曹洞宗が在野の自治的教団であった事からして、後者の意味が強いという風に見たいと思うのである。⁽¹⁾

従つて君臣五位等の五位が時代即応の僧俗一体の特殊な生活規範の意味を持ち、出家学道に於いては一方では清規の実踐という云わば二重構造的な意味を持っていたと一応考えられる。しかし問題なのは、従来云われる如く、僧俗一体の指導原理として、僧俗共に五位を参究したのであるかという事である。⁽²⁾そこで、在家化導用に説かれた仮名法語の内容を検討し、語録等との関係において見る必要がある。

そこで『禪門法語集』所収の仮名法語について見ると、内容的には臨濟宗と曹洞宗が接近している傾向を見る事が出来、またその対象も見出し、項目及び内容からも僧俗一般であることが共通している。⁽³⁾

例えば「大智仮名法語」に「示_ミ菊地寂山入道」とある如く、また「瑩山仮名法語」は坐禪の心要を實に平易に適切に示している。「明峰仮名法語」はやはり坐禪を平易に説き、しかも上中下の三根に分けて説いているのは、「三根坐禪説」にも通ずる面も伺え、その内容と共に在家化導用のものであることを充分予想させる。

「峨山仮名法語」には、

学人始めて入門の時捨離すべき事、語、默、動、静、總是、總不是⁽⁴⁾

と六つに分けて、入門者在俗者対象に平易に説いている。「僧生仮名法語」も峨山の法語を受けて、この六句の上に一句を加えて説いている。道元禅師の名が冠せられ、偽書と考えられている「永平開山仮名法語」の奥書に、「建長二年八月十二日、山下老夫婦授^ミ与之^ミ畢」とあって、山下老夫婦に示したものである。

臨濟宗の仮名法語との比較は別の機会に見てあるのであるが⁽⁵⁾、在家化導においては、「仮名法語」に見られる如く、洞済共通的な一般的な教えが説かれていたと一応見えることが可能である。

それはまた次の事柄がその助証となるものである。

それは例えば「語録」類には、経典の引用もしくは、その開演はほとんどと云つていい位見られないが、仮名法語には見られる。

曹洞宗のものに限つてここで云えば、「光明藏三昧」には『華嚴經』十六、『大毘盧遮那成仏神変加持經』が引用され、「瑩山和尚仮名法語」には『円覺經』が引かれ、「峨山仮名法語」には『參同契』が引かれている。また「永平開山道元和尚仮名法語」には『華嚴經』二ヶ所、『円覺經』、「大徹」には『金剛經』、「大悟」には『華嚴經』二ヶ所、『円覺經』、「大徹」には『金剛經』、「得法」には『金剛經』『師子孔雀經』『法華經』『無念施燈經』『大智度論』『瓔珞經』、「教内」には、天台、華嚴、

三論について論及し、「示僧俗因果事」では「四重禁」が説かれている。

従つて大体の傾向としては、出家には五位等を中心とする公案や語録の参究に、一般僧俗には大乗經典引用による経説の表闡という風に見る事が出来る。無論仮名法語にも古則公案等が引かれてはいるが。

それでは次に、「仮名法語」には機関が説かれていないかという事であるが、五位に関するものは見えず、わずかに他の機関に簡単に触れているのみである。「峨山仮名法語」には臨濟宗について述べた後、曹洞宗について、わずかに「偏正ノ道ヲタテ、偏正ノ方ニ落サル、一物アルコトヲ示ス」と触れているのみである。「永平開山道元和尚仮名法語」に「理致、機関、向上」が見え、これは「大應國師法語」にも見られるものである。

三玄、三要と四喝については、曹洞宗の仮名法語には見られないが、臨濟宗でも少く、「一休仮名法語」に見られるのが⁽⁶⁾である。

このように「仮名法語」は、その対象が僧俗に対してであり、語録類に五位を中心として三玄、三要、四借、四賓主等が説かれているのに對し、五位が仮名法語に説かれていないと五位が特に曹洞宗で重んぜられ、前掲の大慈寺能翁玄慧が説かれているのに對し、五位が仮名法語に説かれていないと五位が特に曹洞宗で重んぜられ、前掲の大慈寺能翁玄慧伝に見られる如く、また泉溪寺齡山延伝に見られる如く、あ

るいは、南英謙宗の五位易学批判の「偏正五位図説詰難」に

見られるように、五位が師資の間で伝授され、「五位顯訣」が秘伝書として扱われ、宗旨の拠り所とされていた、こういった諸点を勘案すると、在俗には説かれず、出家中心に説かれ、参究されていたのではないかといえる。しかしここに問題がある。

即ち太源派の了堂真覚の法嗣竹窓智嚴と能楽の大成者一代の芸術家世阿弥との関係が、補巖寺文書の発見によって研究され、その芸術哲学形成への五位を中心とした曹洞禪の影響が諸氏によつて、立証論究されている。

また、世阿弥と非常に関係深かつた三代将軍義満も曹洞宗と何らかの関係も考えられる。即ち『空華日用工夫集』卷三に、永徳二（一三八二）年、義満が義堂周信、太清清謂の両者に語つた言葉として、「万一変有づば天下を棄てんと欲す。

当に永平長老の平氏に勧むるが如くすべし」と伝えている。

義満と円通寺英仲法俊との関係、また越前竜沢第一祖梅山聞本（一四一七）は義満の招請には応じなかつたが、密接な関係が考えられる。梅山は太源派に属し、洞曹五位を復古した傑堂能勝、南英謙宗師資のうち傑堂の師にあたるので、五位にも深い造詣を持っていたとも考えられ、こういった事から、また世阿弥との関係からも、義満も五位に関心を持つていたのではないかと想像できる。しかしこれは詳しくは後日

を期したい。

さて、その他、先にも掲げた曹洞禪者の語録のうち、機関が在俗に説かれたと見られる個所をあげて見ると、「実峰良秀禪師語録」卷下⁽⁹⁾に「示道城居士」に

道無心叶レ人、在レ位借レ功。人無心叶レ道、転レ功就レ位

と居士に機関を示していることを伺わせ、「川僧禪師語録」卷之上に、清鑑禪定尼に回互正偏を示し、東帰妙松上座に三玄三要を示し、妙玄禪定尼には、

臨濟三玄非捷徑、新豊五位困多蹊⁽¹⁰⁾

と批判的な見方も示している。悟渓成徹優婆塞に対しては、「法戰戈甲布三玄」とあり、月心法泉禪定門には、

布_ニ戈甲於三玄、建_ニ槍旗于五位⁽¹¹⁾

と示している。「菊隱和尚下語」は妙光善女に對して、「有ニ正偏」と示している。

このように極めて少数であるが、在俗の者に示している。

五位に限つて云えば、対象が、禪定門、禪定尼に對してであり、少くとも彼らは禪定に親しむ在家男女人であるから、世阿弥と同様その力量において出家に近いものがあると考えられ、また竹窓智嚴は永平下七世であり、一雲川僧慧濟は永平下九世に當る訳であるから、この頃になると、すでに曹洞宗も宗団として定着し、在俗信者もかなり教養の高い人も出てくるのも考えられるのである。しかしながら、これらはあく

まで特殊な事例に属するものと見るべきで、大勢は前述の如きものと考える。

これを側面から証するものとして、臨済宗においても「四料簡」「五位」等特に「四料簡」が重んぜられながら、「聖一法語」「枯木集」「拔隊和尚仮名法語」「大燈仮名法語」「無住円の「妻鏡」「大應仮名法語」「大燈仮名法語」「枯木集」「拔隊和尚仮名法語」「塩山和混合水集」「月抄」等に見られないこと。先にあげたように、大應国師にわずかに「理致、機関、向上」と、一休に三要三玄、四喝が見られるのみであるという点と同時に、曹洞宗仮名法語と同様、大乗經典が豊富に引用されていることと対応する。また、臨濟宗において、中岩円月（一三〇一—一三七五）が「自歴譜」で「參_ニ永平義雲、略通_ニ洞宗語言_ニ」といつて五位訣を得ているように、また法燈派高山滋照の弟子勇健は、
貞治元年并_ニ三光國師於大雄、國師證明、承_ニ洞家五位君臣之訣^{〔13〕}と洞家君臣五位訣を覺明から学んだと、『本朝高僧伝』卷三十二「信州安養寺沙門勇健」項にあること、「大燈百二十則」に、林際四料簡、四賓主、三玄、三要等があること、また無尽省燈の「正偏五位図説」は広く用いられ、これらは漢文で書かれたものであって出家対象のものであると考えられる。そしてこれらが「仮名法語」類に見られないことと対応するものである。従つて曹洞宗も同様の傾向を示しているので例

外は考えられないといえよう。

〔註〕

(1) この問題に関しては拙稿「中世における洞_ニ洛交渉と曹洞宗の立場」『駒沢大学仏教学部論集』第六号。

(2) この問題に関しては一部触れた。拙稿「中世曹洞宗における五位と仮名法語」『駒沢大学仏教学部論集』第七号。

(3) 『聖一仮名法語』は『坐禪論』とも云い、「聖一國師密開示九条大臣坐禪論」とある如く、弁円が九条道家に与えた老婆親切な垂示である。『大應仮名法語』に「示_ニ病中者」。『大燈仮名法語』に「示_ニ萩原法皇之后」と。『拔隊仮名法語』「与_ニ熊阪男」「与_ニ神竜寺尼長老」「示_ニ中村安芸守月窓聖」「示_ニ赴_ニ臨終_ニ病者_ニ」「示_ニ一方居士本間將監」「依_ニ正法庵主強所望_ニ与_ニ之」「与_ニ古沢尼公」「井口禪門返答」「井口殿御返事」。『月菴仮名法語』「示_ニ宗如禪尼」「示_ニ慈雲禪尼」「示_ニ宗三禪閣」「示_ニ宗清禪閣」「示_ニ存上人」「示_ニ信女慶門」「示_ニ妙光禪人」「示_ニ慶中大姉」「示_ニ了仁居士」「示_ニ宗真居士」「答_ニ信秀禪人」「答_ニ在家人」「示_ニ宗通居士」「示_ニ簡入禪人」「示_ニ道漸居士」「示_ニ予州太守」「示_ニ明貞道人」「答_ニ宰相中將殿問」。『夢窓國師仮名法語』「夢窓國師御詠」に鎌倉亞相武衛直義朝臣、征夷大將軍干時亞相並厩義詮、左武衛將軍禪閣相公羽林、彈正親王、二階堂出羽守、中納言為相卿月房、三浦安芸前司貞連、土岐伯耆前司入道存教。このように対象は僧俗一般である。

(4) 「峨山仮名法語」『禪門法語集』中、五七三頁。

(5) 拙稿「中世曹洞宗における五位と仮名法語」『駒沢大学仏教学部論集』第七号。

(6) 第一篇、第二丁裏—三丁裏。

(7) 「三玄三要」について、「臨濟の三要三玄と申す事の候。やようの事は申しつくしがたく候、天地の間に三つもとむ。三つ

くろしと申す事何そや。是れをしかも三宝と申す事あり。古徳の心は、父と母とわれと、これ三つの宝也。一つもかけては物ならず候。三玄と申すは、みなもとの無性は、くろきかたち也。出生して万の事をおこなひ候、爰に大秘密の事あり、ようの字、これすなわち大事なり。」(「一休仮名法語」

『禪門法語集』上、一二二二頁)「四喝」については、「臨濟の四喝とて、人の死したる所にいたりて喝す。此の心たしかに心得たる僧まれなり。ただぎやうじやのそうと申すは、ほん

ぶんにおとして、これをしごくす、古人の見理此の所にあらす、すでに臨濟は、命根本不絶といへり。しかれば当時の僧たち、大なるあやまちなりとは、みがくにして衣をかへ、人のまなこをつぶして、布施物をとり、おのれが生々世々のほのほをまねく、あわれむべきもの也。」(「一休仮名法語」『禪門法語集』上一二二三頁)

(8) 『空華日用工夫集』卷三。

(9) 本論文、前掲。

(10) 『川僧禪師語録』卷之中『曹洞宗全書』語録一、三二八頁。

(11) 同、三六一頁。

(12) 「中岩和尚自歴譜」、「冬如^ニ越州、參^ニ永平寺義雲禪師」略得^ニ五位訣」(「上州吉祥寺沙門円月」『本朝高僧伝』卷三十三)

(13) 「信州安養寺沙門勇健」『本朝高僧伝』卷三十二。

(14) 荻須純道氏『日本中世禪宗史』二九三頁以下。

五

このように中世は五位と仮名法語に特長づけられるが、これららの提唱者、著者について最後にその経歴との関係について見ると、まず五位の提唱者で仮名法語の素養がある者は、永平義雲、峨山紹碩、明峯素哲、通幻寂靈。能翁玄慧は「極^ニ經史⁽¹⁾」めどおり、南英謙宗がいる。最乗寺大剛明宗は「初為^ニ唱導師、誘^ニ化里巷^ニ……說^ニ專念法⁽²⁾」とあり、月泉良印、瑞巖にも教学の素要がある。

五位の提唱者で臨濟に歴参している者に、瑩山紹瑾、峨山紹碩、明峯素哲、実峰良秀、石屋真梁、普濟善救、盛禪洞夷、新豊雪雙一純、南英謙宗がいる。

次に仮名法語の著者についてみると、瑩山紹瑾は臨濟宗に、峨山紹碩と明峯素哲は共に教宗と臨濟宗に、大智祖繼には臨濟歴参の経歴があり、館開僧生には瑩山禪師と同様出生に關する奇瑞談がある。⁽³⁾

このように五位の提唱者、語録、仮名法語の作者の多くは、教宗での勉学、臨濟歴参の経歴を持つ者が多いと云え
る。こういった面に、教外別伝、不立文字の禪宗にあっても、知識は仏法にはならないが、知識によらなければ仏法を

知ることも表現することも出来ないという矛盾的性格を垣間見る思いがするのである。

以上中世曹洞宗禪者の教学の素養が洞済共通であることを見いながら、なお宗旨参究の中心たる五位について、従来いわれることく僧俗一体の指導原理ではないことを見てきた。

五位は出家に、在家は禪宗一般の立場から仏法を学んでいた事が、機関と仮名法語との関係を通して明らかとなつた。

しかしこの事は曹洞宗が独立の自治的宗団として、五位が出家者の宗団への帰属意識の縦帶の役割を果しており、かかる出家者達を通して在家化導がなされ、僧俗一体の独立の立場が形成されていったものといえよう。

そしてこれらの事はまた、後世江戸初期にあらわれた『禅宗抄物叢刊』として、本学国文学研究室から出版された『巨海代抄』上下、『大淵代抄』『高國代抄』『大淵和尚再吟』等の抄物が洞済共通的宗風を示していること、『大淵代抄』に『眼藏』の語が用いられながら、曹洞宗の独自性が見られたいこと等が指摘されている点からして、上述の見解が側面から証されるものと考えるのである。

〔註〕

- (1) 「日本洞上聯燈錄」卷二、『曹洞宗全書』史伝上、二五三頁。
(2) 「重統日域洞上諸祖伝」卷第一『曹洞宗全書』史伝上、一六

二頁。

(3) 「五位」の提唱者及び「仮名法語」の作者で、出生時もしくはそれ以外に奇瑞を示したり、あるいは母が祈つて出生したと伝えられる者に、瑩山禪師、峨山紹碩、通玄寂靈、石屋真梁、盛禪洞夷等が上げられる。こういった事は宗教的資質と深い関係があるのではなかろうか。

(4) 『大淵代鈔』下巻解題、三三八頁。

〔附記〕教宗、臨濟宗歴参の者、靈夢奇瑞の者、五位の参究者について、本論中に取りあげた者の他に、左記の者がいる。氏名のみを掲げておく。

教宗の参学の経歴を有する者

玄翁玄妙、天徳曇貞、吾宝宗璣、機堂長応、源翁心昭、如仲天闡、仲翁守邦、在山曇璣、月泉性印。

臨濟参学の経歴を有する者

寒巖義尹、無著妙融、綱菴性宗
靈夢奇瑞を有する者

大等一祐、月泉良印、吉祥山仏儕、拈笑宗英、明室昌歎、雲憲祖慶、崇芝性岱、

五位参究者

天叟祖寅、壺菴至簡、瑞巖韶麟、白山良旭、玉翁正光、英仲法俊